

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 4 月 8 日現在

機関番号：12101  
研究種目：研究活動スタート支援  
研究期間：2014～2015  
課題番号：26884018  
研究課題名(和文) 地方都市商店街の現代的状況に関する民俗学的研究

研究課題名(英文) Ethnographic Study on Local Shopping Districts

## 研究代表者

塚原 伸治 (TSUKAHARA, Shinji)

茨城大学・人文学部・准教授

研究者番号：30735569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、地方都市商店街の現代的状況を民俗学的視点から明らかにすることを目標とし、千葉県香取市および福岡県柳川市のふたつの商店街において調査を実施した。その結果以下のことが明らかになった。(1)実際には昭和初期に誕生したものであるとはいえ、すでに世代交代を経験した当事者たちにとって、商店街は「伝統」とみなされていること。(2)商店街は当事者のみならず、外部アクターによって資源化されており、小売店を辞めたあとも自宅として商店街に住み続ける住民の存在は「シャッター商店街」言説のなかで不可視化されていること。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to clarify the contemporary situation of "Shoten-gai(the local city shopping district in Japan)". In order to clarify that, I have carried out fieldwork in two shopping districts of Katori, Chiba prefecture and Yanagawa, Fukuoka prefecture. As a result the following was revealed. (1) Though "Shoten-gai" was born in twentieth century, merchants have forgotten the fact. They regard it as a traditional. (2) External actors (scholars, NPOs, local governments etc...) regard Shoten-gai as cultural and historical resources. This is why the residents who have quitted the business are invisible behind "shutter mall" discourses. Of course, however, they are living still in there.

研究分野：民俗学

キーワード：民俗学 商店街 地方都市 経営

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 応募者のこれまでの研究成果 老舗の伝統と近代

応募者はこれまで、日本の地方都市(千葉県香取市、滋賀県近江八幡市、福岡県柳川市)の老舗企業を対象とし、経営や商行為における伝統の働きについて理解してきた。その研究の結果、以下のようなことが明らかになった。

#### 商行為・経営戦略における伝統

老舗の人々が商売をする場合には、積極的に自らの伝統を活用・創出し、社会に対してアピールすることがまずは重要である。そのため、老舗の人々は様々な形で伝統を活用したり、また、伝統のイメージを創り出したりする。しかし、伝統が老舗の人々にとって活用・創出の対象になっているにもかかわらず、老舗がその伝統に逆に縛られ、自由な動きをとれなくなってしまうということもある。すなわち、個人の主体的なあり方を意識しつつ、同時に人々の意志や管理を超えて働く拘束性を射程に入れることで老舗の人々の実践について理解できるということを明らかにした。また、老舗の人々が伝統を志向する一方で、経済合理性への志向をもっていることを指摘した。伝統と経済合理性という両極のあいだを揺れ動くものとして、老舗の人々の思考や行為を理解すべきだということである。

#### 人々と伝統の関係についての新しい視点

の理解を敷衍することで、人々と伝統の関係について明らかにした。人々は積極的に伝統に対して働きかけ、活用・創造の対象としているが、上述のように、活用・創造の対象であることと、人々が伝統を自由に管理することは同義ではない。伝統は人々に働きかけ、拘束性を発揮する面をもっているのである。このように、変化や創造という側面を組み込みながら、それでも人々に対して伝統が

発揮する力についてやわらかい拘束性という名称を与えた。

更に、伝統がやわらかい拘束性を発揮するときには、実体としての「社会」ではなく、人々によって想像された全体、すなわち「想像された社会」を通して拘束性が発揮されているのである。このような視点は、近年アメリカ民俗学で議論されている新しい伝統論(Elliott Oring, 2012, Just Folklore など)と同期するもので、国際的な研究動向においても重要なものである。以上の成果はすでに雑誌論文や共著の形で公表し、2014年に著書として出版された。

### (2) 成果と特色

研究の成果として、積極的な改変が困難であり、人々に外在するものとしての伝統、あるいは人々が自由に活用・創造し、管理することができる対象としての伝統という両極端の視点を取り込み、老舗の伝統について、動態モデルとして把握することが可能になった。

## 2. 研究の目的

### (1) 課題

以上のように、老舗を対象として家業経営や商行為における伝統の働きかけについて、動態的なモデルとして理解することができるようになったが、以下のような課題が浮上した。

第一に、地域や集団から捉える視点の必要性である。これまでは個々の店と伝統という、二者間の関係を軸に理解することを中心に置き、それぞれの店を取り巻く地域や集団は、変数として捉えるにすぎなかった。しかし、伝統が社会規範として人々に働きかける以上、地域や集団内で共有されたものであることを度外視することができない。

第二に、人々と伝統の関係について、調和

的に捉えすぎているということである。応募者がこれまで示してきた動態的モデルは、変化や創造、改変を取り込みながらも、伝統が力を持ち続けるメカニズムを示した点において有意義なものであったが、そのようなメカニズム自体の揺らぎや、メカニズム自体が破綻するような契機にも目を向ける必要がある。

第三に、フィールドの現実として、これまでのモデルでは捉えきれない人々の実践が芽生えつつあることである。現実を生起していることを、後追いで解釈せざるをえない民族誌的研究の特性として、現実に合わせて解釈モデルを変化させていく必要がある。

## (2) 対象

そこで応募者は、上記3点の課題に答えるため、研究期間内に以下を明らかにすることを具体的な目標として掲げた。

第一に、対象を個々の老舗からその密集地である商店街へと拡大し、地方都市商店街における伝統の社会的拘束性を把握することを目指す(研究対象の拡張)。流動性の高さに反して、伝統や社会規範の強い影響下にある商店街へと視点を広げていくことで、応募者がこれまでに提示した動態モデルの限界を明らかにし、より精度の高いものへと高める。

第二に、店が経営破綻を起こす機会などを通して、人々と伝統の調和的な関係の揺らぎ、あるいはほころびのメカニズムを把握する(分析モデルの拡張)。

第三に、多様なアクターが商店街に関わり、従来の規範とは異なる論理を持ち込むことで、人々と伝統の関係に変化が生じている現状を明らかにする(新しい現象の把握)。

すなわち、「研究対象の拡張」「分析モデルの精緻化」「新しい現象の把握」という3つの方向を組み合わせることで、課題に答えることを目指すのである。

## (3) 特色と意義

商店街という対象には、社会学や歴史学を中心とする人文系諸科学において近年めざましく関心が向けられている(新雅史 2012『商店街はなぜ滅びるのか』、満園勇 2014『日本型大衆消費社会への胎動』)。しかし、成果の中心は文字資料にもとづく歴史学的研究であり、フィールドワークに基づく現状把握の研究成果には乏しい。また、そのような研究方法に起因して、個々の店主がどのような関係の中でどのように生きているのかという点にまで迫った研究は行われておらず、民俗学や文化人類学の参入が待たれている。

そこで、応募者がこれまでの家業経営や商行為に関する研究成果にもとづいて研究を行うことで、学際的な商店街研究に新しい視点をもたらすことができる。

## 3. 研究の方法

### (1) 現地調査

商店街における伝統および社会的規範の把握

歴史的背景の異なる2つの地方都市(千葉県香取市、福岡県柳川市)の中心市街地において、実地調査を実施した。

#### 店の挫折と再起に関する調査

商店街における経営の失敗は、2000年代以降の現代的状況においては、見逃すことができない頻度で発生している。このような状況について具体的な事例を分析し、店の人々と伝統の関係が揺らぎ、ほころんでいく仕組みを調査した。

#### 商店街に参与する多様なアクターに関する調査

人々と伝統の関係に変化が生じているもうひとつの要因として、商店街に参与する多様なアクターの活動について調査する。2地点において、近年、町並みの保存・活用や観光を軸として、NPO法人をはじめとする非営

利組織が林立している。それらの組織は伝統を「保存・活用」することを目的としながら、人々と伝統の関係に変化を与えていることが予想されるため、実態の解明を目指した。

また、コンサルタントや都市計画の研究者がすでに参与しているフィールドであることもふまえ、それらが参入することによってもたらされつつある影響についても調査した。

柳川においてはよりインフォーマルな組織の調査も行った。祭りに参加する商店街の店主たちの友人関係から発展した飛龍会という組織がある。元は祭りの活性化に特化した会だったが、活動内容の拡大にともない、商慣習を含む商店街の伝統にも大きな変化を与えつつある。

## (2) 文献研究

日本の商店街は、学術的な研究対象としては新しいものである。商店街が学際的な研究対象である一方で、民俗学では研究蓄積が極めて乏しい対象であることから、社会学、歴史学、経営学におけるエスノグラフィーなど、多分野にわたる文献研究を行い、本研究の基礎研究として位置づけた。

## 4. 研究成果

### (1) 成果

#### 商店街の「伝統」化

実際には昭和初期に誕生したものであるとはいえ、すでに世代交代を経験した当事者たちにとって、商店街は「伝統」とみなされている。その結果として、実際には個々の商店の流動性が高いにもかかわらず、店主や顧客の心理的な抵抗によって新しい商売方法の導入が失敗することもある(柳川市の事例)。事実としての長い歴史を持たずとも、それが伝統と認識されれば十分な拘束性を発揮するため、商店街はすでに伝統としての

価値と桎梏の両面をまとっているといえる。

諸アクターによる商店街の資源化と在住者の葛藤

商店街の店主は今でも職住一致であることが多い。必然的に近年では、商売を辞めながらも、そこに住み続ける者も一定数生じている。ところが商店街は当事者のみならず、行政、研究者、コンサルタントなどの多様なアクターがそれぞれの思惑を持って参与する場となっており、それらのアクターが目標とするのは、既存の商店街が商業地区として復活することである。小売店を辞めたあとも自宅として商店街に住み続ける住民の存在は、「シャッター商店街」言説のなかで不可視化されている。これらの在住者たちは商売を再開する選択肢も余所に移り住む選択肢も閉ざされた中で、葛藤していることが多い。

### (2) 今後の課題

成果 について、商店街を資源化する諸アクターの動きから明らかにしたが、不可視化されてきた在住者の視点も含めて理解する姿勢が不可欠であることが判明した。具体的には、以下のような課題を今後検討する必要がある。

第一に、理念としての商店街の誕生が論じられてきた一方で、個々の商店街がいかなる需要に基づいて誕生し、どのような役割を担ってきたのかが明らかになっていないことである。

第二に、商店街の「終焉」について正確に理解する必要性である。商店街が都市の人口増加対策と零細小売商の救済という特定の目的に沿って誕生した以上、当初の役割はすでに終えている。それでもなお小規模小売店の持続・再生について検討するためには、一度、商店街の「終焉」を自覚化し、吟味することでその遺産を相続することを考えなければならない。

第三に、商業地区としての役割を終えつつ

ある「シャッター商店街」を、研究の対象とする必要性である。閉店したままの店舗が目立つようになったシャッター商店街は、「商店街＝伝統」というまなざしや、「商店街の活性化」というスローガンのもと、等閑視されるか、あるいは所与の悪とみなされる傾向にある。しかし、商店街を当初の姿のまま「保存」することを目的としない場合、「シャッター商店街」と呼ばれる状況が必ずしもネガティブな結果であると断言できない。生活者の視点から商店街について理解する場合、「活性化」を目指す人々だけではなく、商売を辞めてもなお商店街に留まり続ける人々について理解すべきである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

塚原伸治、『老舗における伝統の活用 町並み保存と伝統の資源化』、遺跡学研究、第12号、80-89、2015、査読有

[学会発表](計 4件)

塚原伸治、『地方都市商店街の100年ポスト「三丁目の夕日」時代の商店街をめぐって』、拡張現実の時代における場所と他者に関する領域横断的研究プロジェクト講演会、2015.12.22、北海道大学(北海道札幌市)

塚原伸治、『担い手が「研究者」になること 私と彼らの「ずれ」と、彼らの「ずらし」』、日本民俗学会第67回年会、2015.10.11、関西学院大学(兵庫県・西宮市)

塚原伸治、『伝統の「柔らかい拘束性」民俗学における伝統論の可能性と課題』、京都民俗学会第280回談話会、2015.7.10、ウィングス京都(京都府・京都市)

塚原伸治、『意図されなかった結末 「佐原囃子」の戦後史をめぐる物語』、日本民

俗学会第66回年会、2014.10.12、岩手県立大学(岩手県・滝沢市)

[図書](計 1件)

塚原伸治、吉川弘文館、『老舗の伝統と近代 家業経営のエスノグラフィー』、2014、290頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

塚原 伸治 (TSUKAHARA SHINJI)

茨城大学・人文学部・准教授

研究者番号：30735569

##### (2) 研究分担者

無し

##### (3) 連携研究者

無し